

234. トイレも変わっていくんだなあの話

技術開発室 総括主任研究員 糸川 浩紀

のっけからプライベートな話で恐縮ですが…、一人娘の大学の卒業式に出席するため、6月上旬に米国・シアトルに行ってきました。日本で大学の卒業式というと、親は出席するんかしら？ という感じですが、米国では両親同伴が常識のようで、招集がかかりました。で、実際に参加してみると…、いるわいるわ、両親どころか親戚一同総出で参戦して盛り上がっているようなヒト達が多数、でした。

それはともかく、久しぶりに米国に行ってみると（前回は高校の卒業式で4年前…）、公共の建物やショッピングモール、飲食店などで、男女共用（←という言い方も不適切なんでしょうけど）のトイレが増えているのに驚きました。いわゆる「ジェンダーレストイレ」とか「オールジェンダートイレ」というやつです。日本でも、今年4月に新宿に出来た歌舞伎町タワーに設置されて賛否両論、ひと騒動あったところですが、あちらでは、男女マークが並んでいたり、見る角度によってマークが切り替わったりと、もはやフツーに存在しています。日本で見られるような、男性用/女性用のエリアに共用ブースを追加、という形だけでなく、そもそも入口の段階で男女の区別が無い、というところが多いなあ、と。もちろん、空港を始め、男女別の公共トイレもたくさん残っていますが、飲食店のレベルでも、新しく出来たところなんかではオールジェンダーがデフォルトになっているんでない？ という勢いです。

次頁の写真は、大学内に新しく出来た校舎内のトイレですが、入り口に"ALL GENDER RESTROOM"とあり、もはや男性/女性というタームやマークすら、使われていません。内部には個室が並んでおり、男性にはお馴染みの小便器が並ぶコーナーはありません（奥の1ブースだけ、小便器のみの個室でした）。私には殆ど抵抗がありませんが（単純に、小用でドアの開閉はめんどいなあ、というくらい）、私の娘曰く、中で見知らぬ男性（に見える人）に遭遇すると、抵抗を感じる部分はあるようです（ジェンダー云々の話ではなく、純粹に身の危険が…というレベルの話で）。日本でも同様の議論は出ていますが、全ての人が抵抗なく使えるよう、今後、更なる進化形のトイレが出てくるのかも知れません。

シアトルという土地柄（リベラル気質でジェンダー的な話にも進歩的）もあるでしょうし、米国内でも州や都市によって温度差はあるようですが…。いずれにせよ、こういうことに驚いている時点で自分が「世界の常識」を知らないことに気付くわけで（スウェーデンのように、こういうトイレがもっと「当たり前」になっている国もあるようです）、ようやく海外渡航が出来るようになりましたので、あちこち見て体験しないとなあ、と帰りの飛行機内で考えた次第です。私が専門とする下水処理技術についても然りで、海外の技術や動向を把握することの重要性（加えて、そのために海外の研究者・技術者と直のコミュニケーションをと

る重要性)を、最近になって改めて認識しています。海外技術＝スゴイ、と時代錯誤なことを考えている訳では全くなく、「世界の常識」も知った上で、日本の技術をどうしていくかを考える必要があるなあ、ということで、昨年度辺りから、そういうリサーチも続けているところです。



大学校舎内のトイレ
(入口掲示)



大学校舎内のトイレ
(内部)

最後に、4年前から大きく変わったと感じた点をもう一つ。飲食店から紙のメニューが消えてました。代わりに各テーブルにはQRコードが提示されており(人生ゲームのコマ並みに小さい札がポツンと立っていることが多い)、それをスマホで読むとメニューのページへ～というスタイルの店が(少なくとも私が行った中では)大多数でした。東京でも、QRコード+スマホによる注文方法を採用している(客にとっては、強いられる)飲食店は珍しくなくなってきましたが、スマホが無いとメニューが全くわからず、皆が淡々とまずはスマホを出してメニューを確認…、というのは、軽く衝撃的でした。デジタル化の進展が、速いです(こちらも、マイクロソフトやアマゾンの本社がありIT系のヒトが街にあふれているというシアトルの特異性があるのかも知れません)。ただし、実際の注文の段では、そのままオンラインで行ける店がある一方、スマホを見ながら店員さんに口頭で～というアナログな店も、結構残っていました。そういうところでは、担当の店員さんがテーブルに来て、自己紹介に始まり店の紹介やら目玉料理やらをハイテンションで喋り倒す、という従前のアメリカンスタイルの接客が残っており、少し安心してしまいました(ネイティブ英語なんて、なに喋ってんのか概ね聴き取れないんですけどね…)